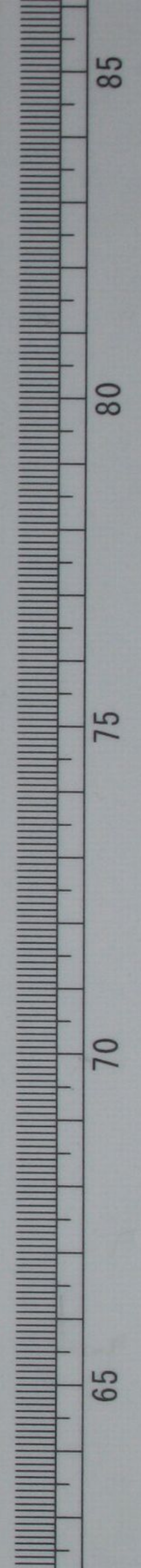


上

中村俊定文庫
文庫 18
1002
1



宵馬登く其書花乃寂中ありり馬比
若狭近江也旅に流る小園山寺乃庵に
日成字子あり痛くしありり馬城主
乃法師也身は馬の教也く比芭蕉翁
其俳諧也撰し世に様ありおえり
也集先置た起るあり幸乃ぬし北
時にあしといふき作所乃上野に曲り



し冬木子走人城移しし羽々文庫城
さうしあ局了ふし中しせうたり写し之
里又あし中しし彼冬木子走人うし一
書城派く申さし局候時々面目之
し書く伊加満うし冬木子槐主る也
に満又し再形庵におし敷度俳諧
城真也

さ満く七名も教局元七夕了可菊

中之局發句し藤堂良躬君とあり
彼翁生涯七俳諧又ししし沙佐し
り此の城主心とく流免有し百七十餘卷
城写し京師に之し鏝差法師にあり
しとせ我俳諧集梓し作局しし
あり奴局あり其書増記並ん也其日
了矣しし書



虚栗

憂^ラ方知^リ酒ノ聖^ラ

貧^ム始^リ覺^ル錢神^ト

元^ト了^ル世亦^ニ酒白^ク食黑^ク

眠^ル故^ク仰^ル火^ノ乃^ク瘦^ク

鶴啼^ク青洛^ノ夏^ノ故隣^ノ之^レ

童子^ツ藥^ノ故^ク折^ル唐^ノ毒^ク

月^ノ故濁^ル江^ノ北^ノ夢^ノ故^ク芦^ノ外^ノ之^レ

芭蕉

一晶

嵐雪

其角

嵐蘭



浪々をいかに田舎子に影

執筆

琵琶洗ふ雨をいかに時雨

晶

衣に烏帽子をいかに紙衣

蕉

浪人共志す身成諾ナリいかに

雪

也ふ乃一夜に入身いかに

蘭

散左九良同いかに宗旨成折言いかに

角

後い退之い肝キモ魂タニ成ハク棄

晶

雷鳥乃初音の背を啼身いかに

蕉

汐い身海に鹽

乃子ニヨモ

身

雪

傾城乃鏡成捨いかに神代を王

晶

羽織に角成いかに風流タハシ雄ヲ

角

化い身棺ヒツキ成出いかに草

蘭

破蕉語い詩に上成次

雪

朝鮮に西成贈身いかに

蕉

笹紫をい松浦斤榕

晶

孫ら見身揚屋いかに萱

雪

庇

蚤オシメの私乃 盃 蚊 吞む 蘭

椀入のぬ影チトロの六十乃 荊ツギイにて

清所アゲにた座アゲのく世ツギイ坂ツギイあり

人乃怪異ケイ 徳長 北雪月乃 厨子シ黒く

松田ムじあ地 雪 晷 雪 晶

きたあし也陣中にて似せ斬ハキのく

山シ飛トに飢え餅ホ 食ホ馬 蘭 角

盗ニ井乃月に伯夷の足あし物 蕉

まくさの武士は 憤イキトラり 柳 角

之居し地絶書夜焼や 柴ヒ 抱ミ 蘭

笑ひさし人也 帰馬 鬼クニイ 晶

曉乃痛言坂母に七満さし人 雪

片力に發心ありてあり 蕉

元上栢序山乃列坂を祢し世 角

柳上す祢し瀑布坂酒吞 蘭

一年三百六十日

開^ラ口^ラ笑^ラ無三日

飽也^ノ中^ノ心^ノ白^ノ乃^ノ東^ノ也 李^ノ下

世^ノ白^ノ波^ノ上^ノ大^ノ根^ノ二^ノ舟 其^ノ角

月^ノ雪^ノ奴^ノ羊^ノ乃^ノ編^ノ戸^ノ也^ノ枯^ノ片^ノ也 下

~~~~~<sup>ノ</sup>る<sup>ノ</sup>き<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>奴<sup>ノ</sup>讀<sup>ノ</sup>ミ<sup>ノ</sup>聲<sup>ノ</sup> 下

百<sup>ノ</sup>奴<sup>ノ</sup>經<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>机<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>秋<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>く<sup>ノ</sup>さ<sup>ノ</sup>免<sup>ノ</sup>也 下

傾<sup>ノ</sup>婦<sup>ノ</sup>奴<sup>ノ</sup>蘭<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>肆<sup>ノ</sup> <sup>イナク</sup>下<sup>ノ</sup>角

飲<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>泪<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>色<sup>ノ</sup>奴<sup>ノ</sup>い<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>ん 下<sup>ノ</sup>角

意<sup>ノ</sup>奴<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>下<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>番<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>魚 下<sup>ノ</sup>角

文<sup>ノ</sup>盲<sup>ノ</sup>か<sup>ノ</sup>令<sup>ノ</sup>持<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>令<sup>ノ</sup>奴<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>以<sup>ノ</sup>て<sup>ノ</sup>唱<sup>ノ</sup>也 下<sup>ノ</sup>角

鶏<sup>ノ</sup>豚<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>片<sup>ノ</sup>ち 養<sup>ノ</sup>下<sup>ノ</sup>角

其<sup>ノ</sup>池<sup>ノ</sup>奴<sup>ノ</sup>忍<sup>ノ</sup>つ<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>し<sup>ノ</sup>ふ<sup>ノ</sup>い<sup>ノ</sup>屋<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>き 下<sup>ノ</sup>角

士<sup>ノ</sup>峯<sup>ノ</sup>北<sup>ノ</sup>寒<sup>ノ</sup>奴<sup>ノ</sup>金<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>加<sup>ノ</sup>賀<sup>ノ</sup>殿 下<sup>ノ</sup>角

袖<sup>ノ</sup>免<sup>ノ</sup>し<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>千<sup>ノ</sup>曳<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>鏡<sup>ノ</sup>刻 下<sup>ノ</sup>角

名<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>し<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>さ<sup>ノ</sup>し<sup>ノ</sup>黒<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>串<sup>ノ</sup>村 下<sup>ノ</sup>角

鬘あゝ乃赤し忍居界内ゆう〜

下

其宵幾々中しを至あしれあき

角

月にあゝ生憎乃ううれ上戸也

下

蒲も白く多あさゆふ篠

角

物白の道分乃種切く〜し

、

院ツリイ々後家々あ居うあき宿

下

初近地山宮系小地切 之し出る

角

仕組切々々八言乃そぢ友

下

玉潔に四房う〜切たのむ哉

角

祢々〜れのも〜蛇〜如馬爰

下

笛に々居骸骨何切々々情コロ

角

三線人乃鬼切法〜む

、

月の袖切〜り々睡居篠乃〜に

、

鳴乃羽〜居夜浴きあ里

芭蕉

恥々〜奴傍切笑々々

、

〜々山寄 傘を三弄

角



笹竹乃こころ成藍に染あしし  
蕉

切場北空にまぬ殿如きふ  
蕉

一乃唯里北庄家に 養ひ  
蕉

斬名にふりし言是故責り  
蕉

ちゆくまは怨乃靈中し啼之り  
蕉

ふ死世に沈む寒食北瘦  
蕉

皆の元貧室し笠のさし儀  
蕉

芭蕉あふし乃蝶下タツ尺よ  
蕉

腐れし能諧大もくくつれ也  
蕉

鞆ボウくくしし痛ぬ夜夜月  
蕉

聳入乃近片く終に初 礎  
蕉

ちう以止くし暮くく英あし  
蕉

朝しと英令の鑄ニ小 紫  
蕉

風くくく夕一切筆電灯北影  
蕉

碎くく婦冷茶の秋北むしし  
蕉

二枚夜北格子鴨城憐む  
蕉

名月乃前、洞に今も至、  
角

金橙、衝に箱、之、  
下

葉生、葦、世捨、奴也、  
、

摺、紳、之、  
角

寸法師、切乃、衣、  
蕉

心、  
下

伊乃、多、門、  
角

化、丈、三、百、人、乃、  
、

酒債、尋、常、往、  
有、

人生、七十、古、來、  
稀、十、リ

詩、高、人、と、  
其、角

冬、湖、日、  
芭蕉

干、純、  
、

黒、  
、

枯、藻、  
角

魔、鬼、神、  
蕉

シロア子  
鐵

乃弓取猛タケキを世一し出よ

角

虎懐フトラロ上ヤヒル堆馬あひ片き

蕉

山寒く四睡乃床吹くあり

角

川之火消し指乃灯

蕉

下司后物被褥も月夜 罗

角

西此城綾上包むあやにく

蕉

哀い上宮城野乃あひ吹調シラ乃

蕉

陸奥乃夷し及石白

角

も乃物北葎乃丸蔀枕うん

蕉

八声乃駒北音城告り

角

詩あきし中飛城貪乃酒積哉

蕉

暮湖月善し駕興吟

蕉

續虛栗

旅人巾カ亦カ心カ初カ分カ

芭蕉

又山系カ花カ寂カしカ

由之

鷓鴣カヤ乃心カ也カ世カ乃カ多カ也カきカに

其角

狼カ也カ乃カ執カ山カ陰カ乃カ

和風

之カけカ亦カ水カ芝カ生カ乃カ露カ乃カ浅カ緑カ

文隣

新舞カ豊カ月カ上カ乃カちカ也カ

仙花

中カ乃カ秋カ盡カ二カ一カ片カ乃カ之カ乃カ乃カ

魚兒

野カ乃カ乃カ乃カ送カ乃カ漢カ舟カ

觀水

神カ垣カ也カ次カ乃カ乃カ乃カ波カ也カ以カ乃カ

全峯

齡カ也カ乃カ乃カ君カ乃カ若カ松カ

嵐雪

酒カ吞カ乃カ乃カ乃カ乃カ並カ以カ乃カ乃カ

執筆

卯カ月カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ

蕉

躑カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ

之

蘿カ一カ面カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ

角

道カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ乃カ

風

月に也 浮人泊津乃 篁人

葛篁をく白しも都あつしく

おもひ事 詠ふ 傀 侶

途三千中にもと馬車 此篁城巻し

津二く舟に 免き 誰ハ

礼史に名乃舟 波り免るし 地

別島 丁坂之 凡琴 七子

順乃峰 志りし 地世乃 外に入

麟

化

峰

蕉

之

雪

舉白

水

萱カヤ乃 ぬけ目 此雪 城燒家

走乃 乃此 纒あ 程に おそり 日 舟

君流き 舟 跡 七 貞 守

明昔の 干ヒ深乃 松坂 うら 津

命を おも 一 船に 這ふ 蟹

起出 しま 水 片 ころし 海乃 ち

ま ぬ 法 寺 坂 ねむ 宵 明

薜 也 石 ぬむ 坂乃 日に 一 ほ 是

化

之

蕉

白

角

雪

水

峰

小畑き花し丸案山子他々人  
 州乃戸北島故酒債にちまらに  
 片福又鳥里故姉にちまらに  
 薰乃志多し面白夕納涼  
 穢さしし氏乃天王  
 清牧形、笛吹智ふ、童、声  
 僧の居りし、腰にまら杖  
 己之れし中文字乃子昂故叫し

風 蕉 白 化 角 峰 風 角

塀乃錦蜀故あし一鳥  
 隠流也寄由乃友に、変りる人  
 笈に出し海苔すふ比  
 谷深丸月しつれ北木目乃  
 声きしれ鳥寸七乃山鳥  
 夕只予集  
 奇し元入探れ梅片り丸  
 ありこむ修乃初雪七篇

雪 水 蕉 白 之  
 芭蕉 彫棠

目には反はまり者なりし

羽織乃よきたけき成

夕月乃道ふけりうんち

出音りことし秋をさむし

あまたあふみぬりいり

有し養ふ駕籠界り

足もしたき種り即し

茶を者火し廻り初

其角

黄山

柗隣

銀杏

棠

角

杏

蕉

下張乃及故又一寸くま

片先ふ指乃方切じ

むつしや襟にさくは

刃法度もし急やせ

夜乃雨宮也方にし

三寸乃残りぬき

中川と噴ぬき

らん中きくをた遠

山

隣

棠

角

蕉

隣

角

棠

思ふ所和尚も友契秋乃庵

言ふに水波揚舟箱戸榎

山鳥乃乃の静けさの静けさあり

移りし舟の合歡乃下留

のけ向し棧の舟も床也と為ぬ

思ひぬ舟に昼乃夕また

景色すし曹洞宗乃寒うに

焦れそよとソソくも成焼く

杏

山

蕉

角

山

杏

隣

棠

又奴等乃主人に志契新なり

梁半とくくはゆりさ

跡しき星の皎けし夜乃月

渡りそし先乃声ひくき雁

松茸契近江漁うの沢山に

息女ある子の下くにあり

老の清竹簾も外にさしこゆ

飛乃名にくくはこふ揚若妃

角

蕉

棠

山

角

杏

蕉

棠



付さし坂中之奈集の馬、桃乃色、中山  
二、乃影乃跨く三線、隣

置巨燧、被書、土方覺書

附夕乃夏の長夕乃、短夕乃、渡りの  
一、夕乃、退く、奴よ、し、れ、る、り

月細く時計、北、管、入、り、し、  
工山

権、奴、い、ろ、く、消、く、く、乃、落、  
芭蕉

又、短、夕、乃、長、夕、乃、移、り、時、の、一、夕、乃、  
寄、る、松、に、附、き、る、り

田舎、翁、に、お、え、初、ま、に、  
倚、腕

折被く前岳乃白北を流しし 芭蕉

入日乃跡乃星ニツ三川

宮中北油控所也 飛し乃真

又前白乃淋し之能く之し移馬し

ツカ

夏中し取し北年也良る也 知足

又乃軍成起仰也 夏 芭蕉

清 落方乃後りしツカ

中乃破し月乃むしし乃月をん 貴言

おの喘む姨の衣う川音 芭蕉

前白せおちし取ふしツカ子もれ也 此あり

静る乃亀の般日取しきし 安信

三度ほししち 柳也土黒 自笑

桃灯也七所乃入口 嵐雪

如房乃ふ若屋の亭主若也きし 芭蕉

遺句の能諧中乃一寸半あり

夏寒兒面乃孫六奴き放し 具角

たしあき風を石菖蒲へる 芭蕉

起情乃句よく前句取又し情とあは

る趣きあり

風ひやうのた切れく乃と毛 具角

侍草にた樸乃たあつてりて 芭蕉

ひき取局とつも前句は餘情也後

句よく冒地又定局半し

お國寺牡丹乃赤し乃盛り上し 芭蕉

櫛乃蓋をる中た竹也子

錯ハ一ウセ情あり前句はよく隨ふこ

今し破れ今川也遊 嵐雪

後り以後撰也風奴詠及し 許六

化成子体

月夜に髪を洗ふも

灯火し砧あしふ子何達  
芭蕉

今時以草羽織奴者連くも  
嵐蘭

幸以乃能に誰も隠る  
芭蕉

三月廿七延中しりふ夏ハ

茂垣に木を削り子堀乃由  
洒堂

此の赤く照る二月 朔日  
許六

神衣した伸號せ飽乃取れ初し  
芭蕉

約掉着るやく宮川せ上り  
嵐蘭

三月續り也意

七、三、又相中一意せ世にあはれ  
笠所

宮に死き乃一浮名を  
曾良

半柄に袖き猶取さし入し  
芭蕉

尺迄ミ乃附

星祭子奴友ハ白毛の枯る迄  
曾良

集に拾り此多取留る月  
芭蕉

向附

老僧乃以小盃初ん中  
芭蕉

武七亂入内東西乃乃  
曾良

村人歸ふ此乃くしま川  
、

落武者北町北道向の草枕  
桃里

正對

魁牛乃壳城踏後丸毫  
呂丸

才の錢の穴々中し爰也是乃之  
芭蕉

白しり志

墨染に如房うきり故形む哉  
其角

寐々々れり志し蛇之成り爰  
李下

移り志

村却れ居るに若殿城高ふ  
其角

一乃娘里の庄跡に巻るり  
芭蕉

きりり白

狎之くく丸皮乃衣子  
良品

宵の七七起るる草院に  
半残

鳳皇ノ御幸ニ

大高

敵奇せ高むく松也声

千リ

宵明乃梨子打鳥帽子名符

芭蕉

執事附

鶴乃尾也蜘蛛也困にうけくはし

曾良

風に刃切置くりふ北打死

芭蕉

白菊をかき稜書 イセノ 園女

おとく〜元禄七年すく北秋云羽に  
一夜七宿集らせあるうふおん北  
おきりうけ給としか乃刃北夏是ら  
ぬの表にせぬもの何くもろふ  
さつきまはせ〜ん夕紀北夏又の枝  
文あつれつ〜く〜く置れさむ  
ら〜〜といえふや羽北〜〜せらふ  
に

鐘とつてを釈教とてしつてはれ  
毛陣鐘時乃鐘お高七鐘  
おやしつるあしつる七上七釈教の  
あるつて別當とよめしつて釈教の  
人らつて付ニシテて亦後実盛も別當  
あり和尚とつてハ瀬乃下良に  
釈教七思ひのあつた其外殿者七  
法印も釈教にのあつてしつてしつて

傾城也其七文字あり毛一白意  
ありあり意七さし合のあつてしつて  
亦ありにあり置つて高つてつて  
つてしつて七つてしつて乃所あつてしつて  
世にしつてしつて七つてしつてしつて

表に釈教七言葉あり白 并ニ鐘七書  
啓七是カ三  
禪骨乃ちつてしつてしつて成り候に 七磨  
尚白西吟四白目 別當殿乃物りき 杖持米 芭蕉

二保漱六句目

昼寐し抄ふ盆七友産

芭蕉

蜻蛉壘す三

旁乃外鐘切障ふ松うし

露沾

深川三吟四句目

山北あぢく七鐘あやあり

云羽

春乃日祭良坂の脚

面白や辰むろく乃鐘

野水

菌ききりたきあつき七鐘

越人

表に志七言葉ある夕七夏

菽七月七句目

才上逢ふ時殊乃朝改さけ帯に

云羽

冬北日炭賣七集七卷脚

以中七瓶し切鏡磨さむ

荷兮

雨七秋五句目

松北風登る扉乃羨北うさくぬ

コ蟾

神祇釈教意無常迹懐あさる

七むろく佛詣に彼是とる表に人七

名京都乃二字信幸園所を七河

伝合戦中者病体飢七夏ハハ

ろくさむろんやとヤリ局城是も

其夕く前くにし出りてあし



さむし物ししき北しんく徳し

珍あり

表に古人北名やふり又

鶴歩行す三

宮村、柳又北水棹さしし

松風

冬北日初雪六夕目

排不し或子折ふ貞徳北富

正平

瓢雅卷五夕目

月影に利休北家坂鼻にうけ

正秀

冬北日五夕目

麻呂の月袖に鞆鼓切りし見

重五

病体速懐に似るふ夕又

栗科卷五夕目

以て馬く之人乃やせの以て馬さよ

越人

二俣瀬五夕目

食傷也後以干しりり於北月

湖風

此道也北卷六夕目

酒し痛也也馬ふ後癖

東扇

曠野集四夕目

百足北懼ふ北赤燈りり

野水

曠野集五夕目

松柱片之押さつし奇し切里

越人

様簞餞別卷五夕目

片隅に虫歯うしし若北月

乙加

木葉北一り四夕目

今年のきけし里北賣火夜

雪芝

榎実北卷六夕目

師走北鳥に編笠も若ん

乙羽

表に因りて夏

春澄七卷七夕目

夕越馬園上りて凡て隠生者し

云羽

あつ三山三

日出し園屋敷に酒持し

曾良

七日鶴四夕目

茶を外城計馬園也戸

表に宮古京也文字少く夏

春澄七卷ノ脇

あつし一秋京城寐之

女丸

あま〜凡て物言ふ月也秋人

景耕丸

表に老姨云羽也夏

江戸橋五夕目

乃乃賀いし面白や祀又乃舞

云羽

蓬萊宮六夕目

酒飲姨也いしに佛に

桐葉

云羽に馴し蝶鳥也児

嵐雪

表に林中也清少佐乃夏

旅麻一の四夕目

砥漉地也に清幸少く夏

東暁

元三毛の四夕目

二葉也草内幸待り

雲庵

春七日四夕目

行幸也いし先洗ふ土黒

蝨絲

ひさこ五夕目

月待し仮也内裏乃司

珎碩

表に合戦也沙路也事

蜻蛉壺 五月目

笠也 五月目

入馬月に落化精以て武者一人

羽

船白た先より衣引片し

杜國

冬 七月 五月目

音もあき具足に月も落く也

羽笠

嵐竹 五月目

古戰場月も静に澄り

嵐蘭

時 秋卷 四月目

武者返詰り 平川也水

其角

春 七月 四月目

鎧あらし火にあはれあり

松風

此も馬乃比中尾我黒言水來りし

才三也中り四月也中しつふ言も

うしりやさしはいつたにさやむ

妃おとし也とし羽乃日也

し表の六ヶしし之初心是也又六句

しに句中り警るゆあり發句の

二節にしし服まこと二やあり發

句北情より超向するの城むのす馬

あり十三の三節に作りしは轉るゆへ  
脇一乃付心發々に起り四乃のすら  
く中し一節に作りし十三中より  
あんぞの外より寄る故にむむと  
すふあり一五乃目長々一あり一七初  
にし一五乃より四乃目へ寄せし作  
すふあり一六乃目一四乃目に之はあり  
之二節に作り一五乃目故乃れ起る

成起りしよる表乃法しをんあり  
此旨故よく心切其上はし千変万化  
七節のありき又あり者し一佛指  
の五路北をこひ成より一尺定尺附  
白すふもの之五路北をこひしつふ  
見聞思行自他内外躰様姿情  
北五川ありき情北起るものしつふ  
の錯ちなり細之強之輕之北五川北

心得に才多ありより〜若く馬  
了〜當時人〜心ゆけさむ〜ぬ白誓  
移徒等七度凡雅七揚乃志あり  
而にしい〜や〜七さひ〜〜七是等  
〜七より〜起ふあり〜七吐〜あり  
高之中〜神無月十二日還化  
〜給〜より〜望〜し〜ふ〜七七餘  
〜七〜あり〜し〜仰〜七七記置

も乃あり

元禄七年十一月

七乃

あり苗三

知事七月被書表七度

春澄に之稻原鳥〜し〜ふあり

具角

亦中〜七秋京城幕元〜し

七九

月以連に之海鳥帽子取〜ふあり

揚水

箠上徳利奴打うさけし也  
耕耜

お保二さ凡川、流畔七葉奴志二き  
丸

いやー山路に錢をくせり  
角

夕越る月奴うまにたうれきし  
青

夜盗に風七音奴お聞き  
水

し留す三

旅痛よー宿の所走七夕月夜  
芭蕉

度さ寒く片もふ清雪  
一井

こやくし笑奴あふ居七葉奴  
越人

孤漁奴足七片幸あふは  
昌碧

琴持乃遊七く奴はさひは  
荷兮

障子ゆはしの流ふもし大  
梵竹

もあし留す三

妹立し千此幸七起雨氣可南  
及肩

友居奴ましし戸奴さ凡月  
珍碩

子稻七葉奴す介七仕舞一用也也  
之道

人走より此へ下 師 昌房

膳棚も沸くく 田舎 正秀

庭落はふれ 乃風 探志

一字と云ふ三

天明北消し夜寒や響む 探志

月さくく 此は乃風 正秀

旅北空國の菜蒔はあらん 昌房

盤子の支考の  
復の彼地 子持帯北志免ちく 盤子

野盤子ト云

廣友乃茶履切人ト云させし 扇

又二つし 莫北焼也 及肩

らん留手三

衣ね衣し梅あらしむる白し可南 曾良

蝶は流らしき入口也 松 前川

掃箒し消る空也うららん 路通

石北空法に墨取指り玉 芭蕉

月移る巻北流りあふて 川

乃と打楮北の流子芋一畑 通

に留才三

物白や夜の明起り〜空北の包 史邦

お世化〜と蚯蚓 鳴止む 沾圃

殊落〜まゝ奴に月の出にりり 羽

廊下口ま〜しゆるに杖北の洞 曾可

ちやら〜ん酒に息子北智高賣之 圃

粟丸太切ふ川上北山 邦

に留才三

松草やま〜奴市葉北魚をり流き 羽

秋北日和の雲し〜と梅馬 文代

宵北月河京乃道中程了 支考

赤中〜のきけし里北賣及 雪芝

四五人の萬喜入奴仕事不能太夫 棧維

いまり〜助に勤奴置之 望翠

奴留才三



芋種や元乃盛り安賣歩以 芭蕉

巨楚肉の骨うり馬 あり 半残

酒好せ既も強んす者 奴 土芳

抗うる児皮せ 衣子 良品

宵明せ七ッ起るる幸一院し 残

いさこせ杉取舟渡し 蕉

おせ字残せ韻字留す三

晴道や苗代時乃角大 師 正秀

明連の産む野嵐せ 鳥 珍碩

菅太せのやくと鳴し 其せ 々

うまかっしき乃口乃文字 秀

目影に利休せは家奴鼻に け

度へ 芋奴世貞の馬あり 碩

こ乃字残せ韻字留す三

炭うりせ己り素丁せし黒う 重五

いせせ化粧し波鏡麻石寒 荷兮

元蘇鳥骨也  
骨に漢より一里

杜國

鶴又弓窓北月らんり

野水

風吹奴秋也日瓶上酒多兒日

芭蕉

秋織弓うさ奴市に振する

羽笠

右者翁奴茅舎に留宿鶴に諸集也

被書奴願以藪屋治良共衛記之者也

